

超短編⑧

「童話 ロマンチストとリアリスト」(20020801)

昔、あるところに仕立屋さん夫婦がおりました。

夫婦にはかわいい双子の姉妹がいて、たいそうかわいがっておりました。

この姉妹は、姿形は瓜二つでしたが、性格は全くの正反対でした。

姉はいつも夢をみているような空想家で、暇さえあれば、お庭でぼーと空を眺めて空想を楽しんでいました。

妹は、姉と対照的に活動的な現実家で、なんでもてきぱきとこなし、小さい頃から家の仕事を任せられていました。

二人の姉妹は年頃になり、両親はそれぞれに良い結婚相手を探すことにしました。

「姉の方はいつもぼーとして、夢ばかり見ているような娘だから、旦那になる者は、女房の分まで働いてくれるような働き者でなければいけない」お父さんが言いました。

「妹は働き者だから、婿様をもらって、仕立屋の仕事を継いでもらいましょう。妹は、何でもてきぱきと上手にこなすから、婿様は少しくらいぼーとしているくらいがちょうどいいでしょう」お母さんが言いました。

しばらくすると、両親の期待通りの若者が二人現れました。

一人は無口なろくろ職人で、朝から夜遅くまで黙って働き続ける働き者で、両親は姉の旦那にぴったりだと思いました。

もう一人は、空想好きで、気がつくとぼーと物思いにふけっている青年で、特に仕事を持ってなかったけれど、両親は妹の婿様にぴったりだと思いました。

都合よく、姉は働き者の青年を、妹はぼーとしている青年を好きになり、はれて二組のカップルは一緒に結婚しました。

それから一年後の同じ日に、姉と妹は男の子を産みました。

姉は自分の夫は働き者で、普通はお嫁さんがする炊事、洗濯までも全部やってくれるので、たいへん感謝していましたが、無口で自分の話相手になってくれないことに不満を持つてました。

妹は自分の夫はいつも楽しい空想話を聞かせてくれるので、一緒にいると居心地はいいけれど、何の仕事もしないことに不満をもっていました。

そんな姉妹だったので、姉は生まれたばかりの自分の子に、大きくなったら自分の話相手になって欲しいという期待を込めて「ロマンチスト」という名前をつけ、妹は大きくなったら自分の仕事を手伝って欲しいという期待を込めて「リアリスト」という名前をつけました。

二人の赤ちゃんは、名前どおりの男の子へと成長していきました。

ロマンチストはいつもお母さんと一緒にいて、お母さんのよい話相手になりました。リアリストはいつもお母さんの仕事の手伝いをして、家計を助けました。

子供たちが15歳になったとき、姉の働き者の夫は、ずうっと働いてばかりいたので、とうとう体を壊してしまい、寝たきり状態になってしまいました。

妹の夫は、やはりずうっと空想ばかりしていたので、しまいに心が現実に帰ってこなくなつて、やはり寝たきり状態になってしまいました。

姉とロマンチストの二人は、ろくろの仕事はもちろん、今まで仕事らしい仕事を何ひとつやつてこなかつたので、家の中にある物を売つて生計を立てていました。

妹とリアリストは仕事に楽しい空想話が聞けないので、すっかり元気がなくなつてしまいました。

双子の姉妹の両親は、かわいい双子の娘たちとかわいい孫たちが不憫に思えて、何かいい解決策はないか考えました。

「ロマンチストは、ぼーとしていて、婿様にそっくりだから、妹の子になれば、きっと妹は元気になるにちがいない。リアリストは働き者で、姉の旦那にそっくりだから、姉の子になれば、きっとよく働いて家計を助けるにちがいない」お父さんがいいました。

「それはいい考えです」お母さんも賛成しました。

双子の姉妹の両親は、姉妹と孫たちを呼んで、言いました「今日から姉は、リアリストを実の子供と思つて一緒に生活しなさい。妹は、ロマンチストを実の子供と思つて一緒に生活しなさい」

それから、リアリストはろくろの仕事を覚えて、立派なろくろ職人になりました。新しいお母さんのために空想好きのお嫁さんをお願い、家族仲良く暮らしました。

ロマンチストは新しいお母さんのために、いつも楽しい空想話を聞かせました。そして、仕立屋の仕事を継ぐために、とても器用で働き者のお嫁さんをお願い、家族仲良く暮らしました。

超短編シリーズはフィクションです。念のため

